（社）東洋音楽学会西日本支部　支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第　64 号（　2009 年　5 月　28 日）

◆ 定例研究会のご案内 ◆

● 第244回　定例研究会

とき：　2009年 6 月20日（土）14時～17時

ところ：京都市立芸術大学 L 2 教室

内容：　「修士論文・博士論文発表」

１）　田村菜々子 (修論・京都市立芸術大学)

「現代仏教信仰におけるご詠歌の諸相－壬生地蔵講を中心として－」

２）　金銀周（キム・ウンジュ）（博論・大阪大学）

「クムスヒョンと『月刊音楽』」

３）　滝（寺田）奈々子（博論・京都市立芸術大学）

「ケクチ・マヤ（グアテマラ高地）の祭礼音楽に関する民族誌的研究－音と身体のコスモロジー」

４）嶋尾かの子（博論・大阪芸術大学）

「口頭伝承社会・チャンパサックにおける古典音楽の構造」

◆定例研究会の記録◆

●第２４１回定例研究会（比較文明学会関西支部第７回例会と合同）

とき：　2008年11月29日（土）　13時半～17時

ところ：京都教育大学（藤森キャンパス）　2 号館 2 階 D4 講義

内容：特別企画「インドの美術と音楽」

コメンテーター：村瀬 智（大手前大学・比較文明学会）　大谷 紀美子（相愛大学）

司会・例会担当：龍村 あや子（京都市立芸術大学）

発表要旨

定金 計次（京都市立芸術大学・非会員）「インドの近世絵画について」

インド美術は、一般に宗教美術と捉えられている。確かに彫刻に関しては、そのように理解しても間違いではない。しかしインド絵画は、他の地域と同様に本来世俗美術として発展し、その過程で宗教と深い関係を持ったものの、近世に至るまで世俗美術としての本質を保持したと言える。宗教における礼拝対象を作ることを主とした彫刻の場合とは異なり、インド絵画全体を観察すると、彫刻も含めたインド美術の独自性が判然として来る。

インド近世絵画は、鑑賞するために描かれたものが中心をなしている。主題にヒンドゥー教の神が多く登場する点に、インドの宗教性が色濃く表れているけれども、表現の本質に世俗美術としての性格が看取される。即ち、若い男女を中心に作品が構成され、しかも若い男女は、成人より早い年齢で描かれているのである。中世に成立したと見られるヒンドゥー教文献である『ヴィシュヌダルモーッタラ・プラーナ』第３部に記された「絵画論」において、神々は 16歳で表すように指示されている。インド絵画を近世まで通観すると、正にインド人は人間を美術の主題とし、 16歳を理想の年齢と捉えて表現し続けたことが判る。更にインド彫刻も、絵画と関係付けて見たときには、全く同様であることに気が付く。インドで風景画が成立しなかった理由は、ここにある。

16歳というのは、完全に生殖能力を備えているという条件下では、最も若い年齢である。インド人は、古来かかる年齢を美術における理想的年齢としたのである。第二次性徴が早く現れる女性の場合は分かり難いが、美術作品において男性は、成人男性の肉体で表現されることが殆どなく、上の特質が端的に現れている。このように独自の傾きを持ったインド美術において、 16歳が活躍の絶頂期と言えるクリシュナが理想の男性としてしばしば登場するのは当然であり、美術によってクリシュナへの信仰が更に高められたと言える。

田中 多佳子（京都教育大学）「北インドの宗教歌謡について」

比較文明学会関西支部（第７回例会）との共催で行われた。両学会所属の龍村氏との打ち合わせの段階で、本企画はインド文化を共通の題材として、京都市立芸術大学の定金氏が美術史の視点から、筆者が音楽学的な視点から話題提供を行うことによって、学際的な議論の喚起を目指すものであると理解した。したがって、「研究発表」と題されてはいるものの、何か新しい研究成果の発表というよりは、むしろこれまで本学会の発表では意図的に避けてきた音楽外的な要素の強い部分に焦点を当て、できるだけ具体的事例をあげながら、それらと音楽との相互関係についての筆者の見解を紹介し議論の間

口を広げることを目指した。内容的には、拙著『ヒンドゥー教徒の集団歌謡―神と人との連鎖構造』（世界思想社、2008年）の中から、「ヒンドゥー教徒はなぜ歌うか」という宗教的・文化的コンテキストと、その結果表出される歌謡（音楽と言葉の連結したもの）としての形態との相互関係についての見解を抽出し、補足的に述べた。

冒頭でまず、ヒンドゥーの神々の世界を「化身」や「属性の有無」といった思想とともに紹介した。続いて、「ヒンドゥー教徒が神々への信仰（バクティ）表明として歌う歌」を宗教歌謡と定義しても、実際には、どの神に向けて、どのような場で、誰が、どのような目的で歌うのか、といったコンテキストに応じ、細やかに異なる音楽形態の表出となることを述べた。さらに、クリシュナ神の聖地ブラジュ地方で行われる集団歌謡に対象を限定し、言葉（歌詞や詩）と音楽の単位の複雑な相互関係、地上の具体的時空と歌の中に表出される神々の世界における時空との相互関係などに触れた。特に、六季あるいは十二ヶ月（バーラーマーサー）という季節感に着目し、それが実際に詩・絵画・民謡という異なる芸術形態で表現されていることをあげ、そういったとらえ方は、ある程度、ラーガ詩文・ラーガマーラー画・音楽用語としてのラーガ、というレベルとパラレルでとらえることができるのではないかという点を示唆した。

報告

今回の例会は、担当例会係の発案で、学際的な交流による新たな見識を得ることと、地域の文明・文化研究に関わる専門家の人的な交流をはかることを目的に、学際的であることを旨とする比較文明学会とのはじめての合同例会を行った。インドという地域をキーワードとし、美術（定金計次）と音楽（田中多佳子）を専門とする地域研究者のお二人にそれぞれの学問分野の発表をお願いし、最後に文化人類学（村瀬智）および音楽学（大谷紀美子）のインド研究者の方々のコメントをいただきながら自由な話し合いを行った。会場はかなりの盛況で、普段はできないような大きな問題に対して様々な分野の方々の発言が聞かれた。最も盛り上がったのは「クリシュナは　16 歳」という、定金氏によれば美術ではよく知られた見識で、音楽学の多くの研究者は「なるほどそうなのか」と納得する思いであった。またアジャンタの壁画に見られる太鼓に関して、音楽学者からの意見が定金氏から求められたが、画像が鮮明でなく、これは今後の課題となった。田中氏の発表に関しては芸術経営論的立場から、「おひねり」に関する質問も行われ、また「連鎖構造」という概念の意味するところに関しての議論などが行われた。

一言で言うと、単に学問的に有意義であるばかりではなく、終了後の合同コンパを含め、めったにない楽しい学会体験をしたという感想を持った。学問の専門化の進む今日、時にはこのように、共通項を持ちながらも異分野で活躍している学者同士の交流の場が

もたれることにより、学問の活性化と地球規模での芸術の総合的研究が行われることを　、これからも期待する。協力していただいた学者の方々には、心から感謝する次第である。

（龍村　あや子　記

訂正

前号の支部便り（第 63 号） P.2 下から４行目末尾に記載の「熊倉功夫氏」は、正しくはその前任者であった「守屋毅氏」であった旨、発言者の 馬淵卯三郎氏より訂正の連絡がありましたのでここに掲載いたします。

◆◇◆ 研究発表申し込みについて ◆◇◆

西日本支部定例研究会の研究発表申し込みは、下記までご連絡ください。

〒 565-8511　大阪府吹田市千里万博公園 10-1 国立民族学博物館 福岡研究室気付

電話 (06) 6878-8351　ファクシミリ　(06) 6878-7503

E-mail: fukuoka@idc.minpaku.ac.jp

◇◆◇ 入会申し込み・住所変更について ◇◆◇

入会ご希望の方は、 80 円切手を同封し、下記の学会本部事務局へ入会案内・申し込み用紙をご請求ください。入会申し込み用紙は、ホームページからもダウンロードできます。
会員の住所変更等についても本部事務局へお知らせください。

社団法人 東洋音楽学会

事務所　〒 110-0005　東京都台東区上野　3-6-3　三春ビル 307 号室

電話　(03)3832-5152　ファクシミリ　(03) 3832-5152

学会ホームページ　http://wwwsoc.nii.ac.jp/tog/

支部だより　第 64 号

発行：（社）東洋音楽学会西日本支部　編集担当：奥中康人、谷正人

〒 565-8511　大阪府吹田市千里万博公園 10-1 国立民族学博物館　福岡研究室気付

電話　(06) 6878-8351　ファクシミリ　(06) 6878-7503

E-mail: fukuoka@idc.minpaku.ac.jp